

アウシュヴィッツ収容所について語る ポーランド作家——ゾフィア・ナウコフスカ

Urszula Styczek

(受付 2006年5月10日)

ヨーロッパでの第二次世界大戦は、戦場の戦い、バルチザンの絶望的な戦闘、敵軍の空襲というなどのイメージだけではない。第一次世界大戦と異なって、普通の市民もその戦争で犠牲者となった。さらに、直接敵軍との戦いでなくても、市民は強制的に収容所され、人間の想像を超える過激的な労働をさせられ、ほとんど食事を与えられずに残酷な状況で生きていた。1930年代からアウシュヴィッツをはじめヨーロッパ全体において（主にポーランドとドイツ）強制労働収容所が建設されはじめた。数百万人が命を失い、数千人しか生き残っていない。すべての収容所の体験について語ろうとしても、絶対語りきれないのである。この小論では、ポーランド人である筆者はアウシュヴィッツ収容所の体験に限ることにする。

さらに、もう一つの問題に注意したい。アウシュヴィッツ収容所といえば、ユダヤ人が殺された場所であるというのが一般の知識であるが、筆者がここで強調したいのは、アウシュヴィッツ収容所が人間（ユダヤ人だけでなく）の虐殺の場所であったということである。ソ連の捕虜、ポーランドなどの政治犯、偶然に町で捕まれた一般市民、共産主義者、ジブシー、キリスト教の神父・牧師、同性愛者、売春婦などが収容所に輸送され、重労働をさせられた。さらに、アウシュヴィッツ収容所に送られたら、絶対出られなかったという一般のイメージがあると思う。ところが、これは主にユダヤ人に限られた事実である。（もちろん、ユダヤ人でも無事に救われて、アウシュヴィッツ収容所から出て自分の体験について証言したこともある。）囚人が病気、過労、寒気で死ななかつたら、収容所から解放される可能性もあった。それ故に、アウシュヴィッツについての事実は収容所

から外界に流れてきた。

21世紀に住んでいるわれわれは、前の世代の悲劇を忘れつつある。この記憶を消さないために収容所を経験した元の囚人たちは様々な手段で我々に伝えるように努力している。たとえば、記録文学のような形である日記、手記や回顧記など、あるいはフィクションである小説、随筆や詩など、さらにそのほかの芸術方法である絵画、彫刻、映画などで収容所について語っている。しかし、この小論では、扱われる芸術手段が短編小説である。

筆者の「収容所文学」の研究の中ではアウシュヴィッツ収容所について書いた作家を二つのグループに分けた。それらは収容所の被害者而非被害者である。すなわち、アウシュヴィッツに送られて、様々の理由で解放された作家であり、あるいは直接経験していないが多くの目撃者から話を聞いて、小説の形で彼らの悲劇をまとめたのである。本稿で扱われている作品は、二番目のグループの作家の作品である。これはポーランドの作家、ゾフィア・ナウコフスカ (Zofia Nalkowska, 1884–1954) によって書かれた記録の短篇集『メダリヨヌイ』(1946, *Medaliony*) である。ナウコフスカはアウシュヴィッツの経験を持たない作家として強制収容所について語っている。

1) 行動主義の代表的な作家としてのナウコフスカ

『メダリヨヌイ』について論じる前に、ナウコフスカの文学に関する一つの特徴を示さなければならない。彼女は戦前から文学作品における行動主義¹⁾の代表者の一人であった。

- 1) 〈行動主義〉(behaviorism) は「客観的に観察し得る行動のみを研究対象とする心理学説で J. B. Watson の主唱したもの；米国心理学の主流をなし、古典的行動主義といわれる；後、その修正として新行動主義が生まれる。」“New English-Japanese Dictionary”, p. 190 による。あるいは、「〈行動主義〉 1. (behaviorism) アメリカのワトソンが唱えた現代心理学の一学説。心理学の対象を、刺激と外から観察できる反応(行動)との間の法則的關係に限定し、意識に関する概念を排除することを提唱。2. 行動を重んずる文芸上の主義。第一次大戦後のフランス文

彼女の作品を分析すると、この考え方の原則がはっきり見えるのである。つまり、『メダリヨヌイ』のナレーションは単純かつ簡潔で、ナウコフスカは事実を伝えることだけに言葉を限定し、ナチスの犯罪、人類の絶滅、虐殺の恐怖などについてのコメントは一切しない。そして、その単なる事実が数えきれない程の注釈よりもっと激しく強い印象を読者に与える。これは行動主義の文学の特徴であるが、『メダリヨヌイ』にはもっとも適切な手法である。

2) 『メダリヨヌイ』²⁾ の構成と起源

ポーランドが123年間にわたる他国の支配後、1918年にやっと独立国家となったばかりの頃にデビューした女性作家、ナウコフスカは、第二次世界大戦の直後、すなわち1946年に、きわめて小さな短篇小説集『メダリヨヌイ』で改めて有名になった。この短篇小説集は次の物語から成り立っている。すなわち、「シュパンナー教授」(Profesor Spanner)³⁾—ドイツの研究

↳ 壇に興ったダダイズムおよび超現実主義に内在する虚無主義に対する批判と再建を企図した。」広辞苑第四版 p. 878 による。行動主義は20世紀、特に1915-1930年に盛んに行われた心理学の学説である。客観的な心理の観察を強調し、外面に現れる特徴だけを分析した。研究では意識といった概念や内省主義的な方法を取り除いた。行動主義はとくにアメリカの文学に強い影響を与えた。つまり、主人公の心理分析を省いて、もっぱら彼らの外界への反応だけを描いたのである。主人公たちの間の会話が第一に重要なものであった。この文学の流派は自然主義の考え方に結びついている。そして、ポーランドの戦後文学において、行動主義にもっとも近かったのはポロフスキの作品であった。“Słownik. Kierunki-szkoly-terminy literackie”, p. 44 による。

- 2) この短篇集は日本で『ロケット』という題名で紹介されている。しかし、この作品の場合、〈メダリヨヌイ〉ということばは〈ロケット〉、すなわち写真などを入れて首から吊すようになっている金属製の装身具を意味するものではない。その意味はあとに本文中で説明する。
- 3) 2000年に小原雅俊氏によって翻訳されている（小原雅俊編『文学の贈り物——東中欧文学アンソロジー』東京、未知谷）。しかし筆者はここでは引用にあたり筆者の訳を使用する。

所で人間の皮膚(皮下脂肪)を使用して石鹼が生産された事件一、「底」(Dno)―収容所に送られた女性の物語一、「墓地の女」(Kobieta cementarna), 「線路の傍で」(Przy torze kolejowym)⁴⁾, 「ドヴォイラ・ジェロナ」(Dwojra Zielona), 「ウィーザ」(Wiza)―ユダヤ人の絶滅について一, 「人間は強い」(Człowiek jest mocny), そして「オシフィエンチムの大人たちと子供たち」(Dorośli i dzieci w Oświęcimiu)―ガス室で殺された大人たちと子供たちの話一である。この八つの小品は, それぞれの話がスケッチのように, すなわちナチス刑務所や収容所の情景を短い文章で書きとめて, これらの事実を全て語るといふより, その恐ろしい雰囲気暗示するものとなっている。ナウコフスカは戦前からすでに「事実の文学」(literatura faktu) の代表的作家として活動しており, 『メダリヨヌィ』でも事実を記録するルポルタージュの形を使ったのである。

『メダリヨヌィ』という題名の意味を考えてみる。〈メダリヨン〉⁵⁾ というのは, 一般的な意味では日本語の「ロケット」に当たるが, ここでは〈墓石に特殊な技術を使って焼き付けた遺影〉を指している。短編集の構成をみると, それぞれの物語は, 収容所で殺された人間, あるいはそこで死ぬはずのところを生き延びた人間の名誉のために捧げられたものである。ナウコフスカは第二次世界大戦の時期をワルシャワで過ごした。そしてその時代を『戦時中の日記』(Dzienniki czasu wojny, 1970-2000)⁶⁾ で描いた。ワルシャワの墓地を訪れた後, 1944年5月7日の日付の記録で次のように書いている。“Wracalam aleja grobow, szpalerem nagromadzonych trupow.

4) 「墓地の女」は「墓場の女」として, また「線路の傍で」は「線路ぎわで」として, すでに1963年に米川和夫氏によって訳出されている(『世界短編文学全集10北欧・東欧文学』集英社)。

5) 「メダリヨヌィ」という形は「メダリヨン」名詞の複数形である。

6) ナウコフスカは1899年から『日記』(Dzienniki)を書き始めて, 戦後も『戦時中の日記』(Dzienniki czasu wojny)として書き続けたが, 彼女の『日記』が初めて出版されたのは1971年である。これには1899-1939年の時期だけが含まれている。戦中・戦後の部分はその後少しずつ出版され始める。

Znajome nazwiska, sylwetki, medaliony".⁷⁾ (死体を集めて重ねた人垣、お墓の小道を歩いて帰って来た。よく知っている名前、姿、メダリヨヌイがあった。) ナウコフスカは八つの〈メダリヨヌイ〉を選び、極めて短い文章で彼らの物語を紹介している。亡くなった人たちの最期の瞬間の思い出のようである。

ナウコフスカはボロフスキとは異なり、書いた事実を自分自身が経験したことはなかったため、彼女の感情的なアプローチ、想像的なイメージもボロフスキのそれとは全く異なっていた。彼女は「ポーランドにおけるヒトラー犯罪調査中央委員会」(Główna Komisja Badania Zbrodni Hitlerowskich w Polsce) の一員として、1945年に多数の強制収容所の現場を訪れたり、収容所の生存者や犯罪の目撃者の証言を聞いたりした結果をまとめて、『メダリヨヌイ』を書いた。収容所について彼女の知識は断片的であったが、当時は、収容所の経験者によって書かれた記録書と比べてもなお、ナウコフスカが経験者の一人であるとよく勘違いされた。

3) 『メダリヨヌイ』の文体

『メダリヨヌイ』を論じる時に、重要な問題がいくつかある。文章のスタイルもその一つである。このスタイルは決して偶然に選ばれたものではない。そこには強い理由があるのである。戦前、叙情的で豊かな表現を使用したことによってすでに有名になっていたナウコフスカは、戦後の作品、『メダリヨヌイ』では人間の悲劇を正確に表現するために、また単に事実のみを伝えるために、感情を表す複雑な表現を一切使おうとしなかった。しかし、それぞれの物語には込み入った筋がある。このような物語を導入して、戦争直後のポーランド社会で広がっていた他の民族に対する偏見、とくにユダヤ人に対して「助けてあげられなかったという罪」、あるいは犯罪者におけるモラルの問題などについて遠慮せずに行った。例を挙げる。

7) Zofia Nalkowska, "Medaliony", KAW, Warszawa, 1982. Michał Sprusiński の後書き p. 71 による。

たとえば、『メダリヨヌイ』の中の最も有名な小品、「線路の傍で」では、アウシュヴィッツへの護送列車から逃げる途中で、足を折った若いユダヤ人の女と、彼女をほとんど助けようともしないまわりの村人との関係を語ることで、ユダヤ人に対する無関心の問題を示している。他の物語でも、この無関心の問題、あるいはユダヤ人の虐殺の問題、またアウシュヴィッツ収容所のガス室で絶滅させられた、全ヨーロッパから輸送された大人たちと子供たちの問題などが扱われている。

ナウコフスカは、戦時中に禁止されたポーランドの地下文芸運動に積極的に参加したことによって、自分がいずれ逮捕され、強制収容所へ送られるであろうという恐れの中で生きていた。しかし、彼女は幸いにもそのような運命をたどることはなかった。そしてあたかも運命の悪戯でもあるかのように、生き残った彼女は戦争直後にヒトラー犯罪を調査する委員会の委員となり⁸⁾、かつての強制収容所の囚人たちの聞き取り調査を行った。その結果として、この『メダリヨヌイ』を書いたのである。この作品は文芸評論家であるトマシュ・ヴロチニスキ (Tomasz Wroczyński)、クリステイナ・ヘスカ＝クファシニエヴィッチ (Krystyna Heska-Kwaśniewicz) などによって、ポーランド戦後文学の一つのジャンルとしての「事実の文学」の中でも、〈反全体主義の傑作〉と見なされたものである。

収容所生活の経験者ではないナウコフスカは、この恐ろしい事実をなるべく精密に伝える方法の一つとして、目撃者の報告という形を選んだ。彼女の物語の手法は、戦前に人気のあった様々な種類の小説の中から、もっとも単純な方法を使ったのである。というのは、たくさんの人々の悲劇を正しく伝えるということが、作家によって適切に選ばれた、少数の説得力

8) 戦時中、ナウコフスカはワルシャワで小説や日記を書き続けて、インテリの作家の立場から当時の占領期の情勢を非難した。その故に、いつでも逮捕され、政治犯として収容所へ送られる可能性があった。戦後になって彼女はヒトラー犯罪調査委員会の一員としてその収容所を見学したわけであるが、場合によっては、むしろ彼女自身が被害を受け、収容所で親衛隊によって調査される側に立った可能性も十分にあったわけである。

ある事実のみを語ることによって、行われなければならないからである。つまり、真正な証言に基づいて書かれるということは、ただ事実の報告だけを綴り、作家のコメントや事実に対する評価が完全に避けることができるということである。ナウコフスカの作品の主人公である報告者や目撃者は、自分の経験に対して感情的な評価をしないし、単なる事実を伝えるだけで、自分の言葉に対してさえ驚かないし、経験したことに対して憤激もしない。却って、その恐ろしさに対して無関心で、収容所の生活を統制する、いわゆる〈原則〉に従うのが当然であると登場人物は思ったりするのである。そして、それ以上の感情的な表現が作家によって導入されたとしても、読者により強い印象を与えないであろうと考えられる。それ故に、ナウコフスカは自分のコメントをできる限り避けて、報告者の言葉をそのまま引用しているように書いている。彼女の主人公は一般の人々で、彼らは自分たちが語っていることをまるで信じていないかのように見える。しかし、彼らの物語が上手にまとめられた話でなくとも、その真正な報告そのものは完璧に伝わるように感じられる。ナウコフスカは、戦前に流行した心理小説の手法⁹⁾を取らなかった。

〈収容所の非被害者〉としてのナウコフスカの作品には、同じく〈収容所の非被害者〉であるアンジェイエフスキの小説における主人公たちの心理描写のようなものは全くない。一方で、単なる事実を伝えるという点において、彼女の作品は、アンジェイエフスキよりも、〈収容所の被害者〉としてのボロフスキの小説の手法に近いと思われる。即ち、彼女は強制収容所について事実を再現するだけである。あるいは『メダリヨヌイ』はちょうどフィクションと「事実の文学」との間に位置する作品と言えるかもしれない。つまり、ナウコフスカは作家としてだけでなく、歴史研究者あるいは記録者の役割をも果たしているのである。

9) 主人公の言葉や態度に対する心理的なコメントを一切行わなかったのである。作家自身の行うコメントといえは、報告者たちの態度を観察し、描写するときだけである。

4) 『メダリヨヌイ』の考察

(1) 「人間が人間に対してこのような運命を定めた」

“Ludzie ludziom zgotowali¹⁰⁾ ten los”. (人間が人間に対してこのような運命を定めた。) この言葉あるいは類似する言葉は、最初はどこで書かれたかと調べる。ワルシャワ蜂起が勃発する少し前、1944年7月にナウコフスカは『戦時中の日記』で下記のように書いている。

人間が人間に対してこのような運命を定める。人間はこの世界のすべてであり、自らの価値がどのようなものであれ、そしてそのようなことをする権利をもっているかどうかは別として、ただ人間だけが現実を決定する。

この言葉を書いた頃、第二次世界大戦はいっそう激しくなっていたが、まだ終わりは見えず、ワルシャワ市民はこの戦争に勝つことはないと分かっているながら蜂起したのである。この7月はちょうどこの戦いの準備の時期であった。戦時中に書いたこの言葉は、その後で彼女の短篇集『メダリヨヌイ』の中心的テーマとなったのである。一つの動詞だけが変わった。日記の「運命を定める」は『メダリヨネイ』の「運命を定めた」となったのである。

この言葉の意味、あるいは短編集の中心的テーマの意味は何であろうか。我々は収容所における虐殺を考えると、〈非人間的行動〉〈非人間的犯罪〉など、〈非人間的〉という修飾語のついた表現を使うであろう。私たち現代人は自分がヒューマニスト (humanist, 人道主義者) であると信じ、さらに人間が何らかの犯罪を行うにあたって、限界というものがあると信じている。しかし、事実はそれと逆である。ナチスの犯罪は、このような、人間にはある種の〈非人間的〉〈非人道的〉行為はできないはずであるという、一般通念を否定するものである。彼らが行った犯罪行為は人間性と

10) 下線筆者。

いう概念を嘲笑うものであったのである。そして、彼らのしたことを単に〈非人間的〉行為と名づけるだけであれば、それは完全に表現力を失った、ただの平凡な言い方にしかならない。なぜかと言えば、アウシュヴィッツは確かに人間が作ったものだからである。この表現が実際に持つ矛盾性を、ナウコフスカが言う通りに、強調するためには、アウシュヴィッツもまた〈人間的行動〉の一つであり、〈人間が人間に〉この恐ろしい行為をしたのであるということを言い続けなければならない。そして、ナウコフスカのアウシュヴィッツについて語る言葉は、〈人間〉というものが何者であるのか、〈ヒューマニズム〉や〈人間性〉という概念が本当のところどのようなものであるのかといったことを、今一度我々に考え直させるのである。

先の言葉に関してもう一つの問題に触れておきたい。この「人間が人間に対してこのような運命を定めた」という言葉は、〈ある特定の人間〉が神のように〈他の人間〉の運命を決めて、その人間を殺したということである。これらの恐ろしい出来事について語る時、ナウコフスカ自身、この「人間が人間に対して」したことについて驚愕している。彼女が見、そして証人たちから聞いたことは、とても人間のしたこととは思えないからである。ナウコフスカは〈驚いている〉記録者としての立場に立って、あとはひたすら事実を語るだけである。彼女は、証言を聴きながら、目撃者にこの苦勞、悩みを引き起こさせた責務者が誰であるのかと、心のどこかで疑問を抱く。元囚人たちの悩みを和らげる責任は誰にあるのであろうか。さらに、悲劇の責任者は誰なのか、告発されるべき者は誰なのか、彼らはただ命令に従っただけなのか、それともその命令を、情熱をもって遂行したのか、といった問いに作家の無力感が現れてくる。しかし、ここで解決できない矛盾が発生する。キリスト教における道徳原則に従って、どのように犯罪者、人殺しを罰すればよいのであろうか。キリスト教の信仰に従って、このアウシュヴィッツで起こった惨事を理解することができるか。あるいはアウシュヴィッツを非難したり支持したりすることは可能であろうか。もし全知全能の神が自分のアイデアで人間を創ったのだとしたら、どう

してこの神はこのような悲劇に沈黙したのであろうか、神はアウシュヴィッツにいたのであろうか。そもそも神によって創られた人間が自分の悪意に従ってアウシュヴィッツを創造したことには、神の同意はあったのであろうかなど、こういった問いに答えることはなお困難である。アウシュヴィッツの出来事の評価にあたったナウコフスカの無力感もこのようなものであった。アウシュヴィッツを一義的に評価することは、そもそも不可能なのである。その故に彼女は自らの言葉による評価を避け、ただ事実のみを伝えることにしたと思われる。

もし文学作品がこの悲劇の責任者を指摘することになるとすれば、やはり、それは個人の問題ではなく、〈集団の責任〉であると考えざるをえない。しかし、そのように言ったとすれば、結局は誰も悪くないということになってしまうであろう。責任者の数があまりに多くなり、告発する側にも告発される側にも罪があり、責任があるということになってしまうであろう。さらに、ボロフスキの作品にもあるように、元囚人たちに対してもこの〈告発〉が行われることになる。アウシュヴィッツを生き残った人は皆共犯者である。もちろん、文字通りの意味で、つまり他の囚人を直接殺したり殺すことを手伝ったりしたという意味でそうであったのではなく、他人の悲劇に対して無関心であったという意味で、生き残った囚人にも罪がある。

人間の本能は第一に自分の命を守ることである。収容所の生活の中で、あるいは収容所へ輸送される途中の恐怖の中で生きていくと、人間は先に自分のこと、家族のことを考えるであろう。その後、もし余裕があれば、他人のことも考え始める。それでは、収容所の場合はどうであろうか。本能の反応がより複雑となり、自分が殺されないように努力するのは別として、他の囚人が殺されることに対して黙ったまま平気な顔をしたとすれば、これは罪になるのか、という疑問が起きる。もちろん、平和の時ならば、これは必ず大きな罪となる。しかし、収容所生活というような極限的な場合には、人間の行動をどのように判断すればいいのか。また、その当時の判断に立つのではなく、現在の判断に立つとすれば、つまり平和的な時代

からみて判断を下すとすれば、囚人たちのこの生き残るといふ本能をどのように見ればよいのか。

(2) 〈報告の断片〉

描くことができない事実を、どのように描けばよいのか、あるいは作家が最後まで知ることのできない事実をどのように正しく伝えればよいのか。確かにナウコフスカはこのような疑問に何度も直面したのであろう。彼女は『戦時中の日記』では、占領下のポーランドを〈自由な〉国と〈有刺鉄線に囲まれた〉¹¹⁾ 国に分けていた。この〈自由な〉ポーランドから、ワルシャワのゲットーや強制収容所に閉じ込められた人々の苦悩を考えようとするのは、いくら想像力を究めても不可能である。この地獄を経験していないからである。我々自らが経験者でない者には、他人の悩み、他人の悲劇は断片的にしか分からない。このような考え方がナウコフスカの『メダリヨヌイ』の特徴である。以上に述べた論の具体的な一例として、収容所内部の出来事を直接的に描いたとはいえない作品「墓地の女」の最後の部分をみってみる。この短編はゲットーの壁のすぐ傍にあった〈自由な〉墓地を管理していた女の話である。ここでは、主人公である〈墓地の女〉も、この話を記録するナウコフスカも完全な形で事実を知らない。自らが経験していないからである。壁の向こうの奇妙な音、聞こえてくる人間の叫び声だけが、向こう側にあるこの人間の悲劇を想像することを可能にするのである。ナウコフスカは次のように書いている。

現実には耐えうる。全てが知られてはいないからである。この現実には、切れ切れの出来事という形や断片的な報告という形をとって我々のもとに届く。私たちは、抵抗しない人々の静かな死の行列を知っている。炎の中へ飛び込んだり、絶壁から飛び降りたりすることを知っている。しかし、我々は壁のこちら側にいるのだ。

11) これはボロフスキのある詩の題名、「有刺鉄線に囲まれた世界の切れ端」から取った表現である。

この断片的な事実についての言葉の意味を分析する。もし私たちが現実を支配する悪の全てを意識して、他人の苦しみ全体が分かるとすれば、この〈事実〉あるいは現実には絶対に耐えられないものになるであろう。しかし幸いに、人間の想像力にはある限界があり、また人間には忘れるという能力がある。これはナウコフスカの〈現実には耐えうる〉という言葉に関する心理的な解釈である。しかし、作家のこの言葉を芸術的な面からみれば、この事実は〈断片的な報告〉あるいは〈報告の断片〉であるからこそ、我々にとってより受容しやすくなり、語っている事実に対する衝撃がより少なくなるのである。もしすべての事実がそのまま分かるとなれば、我々の想像力もすべて壊されるであろう。そのすべての事実を意識することより、強制収容所やユダヤ人のゲッターで起こった惨事をこの〈報告の断片〉のみを通して理解すればよいのである。そのあとには、想像するしかない。

(3) 〈精神に対する虐殺〉——無罪の犯罪

短編集の冒頭の物語、「シュパンナー教授」を見る。この話も、「墓地の女」と同じく、直接にはアウシュヴィッツ収容所と関係を持たないが、アウシュヴィッツにおいて行われたのと類似の〈生産作業〉について描かれているので、ここで考察してみる。物語は著名な研究者、シュパンナー教授のところで働いていた青年の報告である。彼らはグダニスクにあったドイツの研究所で人間の皮下脂肪から石鹼を生産していたのである。この物語のテーマがこのようなものであることを考えると、この話は全短編集の中でももっとも衝撃的なものであるに違いない。もちろん、アウシュヴィッツでは人間を対象にして様々な実験が行われていたが、ナウコフスカの作品には具体的な言語表現として、この実験を告発したり、批判したり、責めたりする言葉は一切ないのである。シュパンナー教授の助手である青年は平気な顔をして、実験についても普通の話をするように語っている。ナウコフスカは彼の言葉を〈そのまま〉報告するだけで、作家からのコメントは一切ない。もしここで、ドイツ人のこの行動に対する道徳的な

判断が述べられているとすれば、かえってこの事実に対する衝撃が弱くなるであろう。ナウコフスカは〈報告の断片〉だけを伝え、それ以上は、つまり非難、判断などは読者にまかせられている。ナウコフスカはこの青年の行動を責めない理由を語らないが、この批判を読者にまかせる。すなわち、この戦争において誰に罪があり、誰がより悪かったのかという疑問に対して読者自身が答えを見いだすはずであるという考え方を意味する。もちろん、ナチス・ドイツが絶対に悪かったことは当然である。そして、もしそのように言ってしまうと、ドイツ側が悪かったということで、疑問の解決を見つけ、ある程度まで問題がなくなってしまうであろう。しかし、モラルの問題に最終的な解決を与えないというのは、ナウコフスカの作品の特徴である。すなわち、ドイツ側だけでなく、彼らの実験に参加したグダニスク出身の若者も悪いのである。自分の行為の持つ意味に対して無関心であるということによって、本来は犠牲者であるはずの青年が、実は、犯罪者の一人となっているのである。それと同時に、彼は、ナチスの非人間的な制度と暴力システムによって育てられた人間の一人として、倫理的に墮落させられた〈犠牲者〉となり、自分の行動の恐ろしさをもはや感じなくなっているということも言える。ナウコフスカは青年の言葉をそのまま記述している。

「人間の脂肪から石鹼を作ることが犯罪だとは、誰にも言われていませんでしたか」

彼は全く正直に答えた。

「そんなことは誰にも言われていませんでした」

しかし、この質問が彼に考えさせる。次の質問にはすぐに答えない。しばらくして答え始めるが、決して不承不承という様子でもない。

「そうです。いろんな人たちが研究所にもシュパンナーのところにもやって来ましたが、(略)彼らが石鹼を見たかどうかは私には言えません。見た可能性もあります。視察の時にも、石鹼の作り方を書いた紙はいつも壁にかかっていた。ですから、これを読んだら、何を作っていたか分かってはいたはず」

「そう、教授が僕に下働きの連中と一緒にこの石鹸を作るように命令しました。なぜ僕だったのか。分かりません。シュバンナーがいつもこの石鹸をどこかに隠していたことを見て、私自身は、彼が横領でもやっているのじゃないかと思いました。もし彼が石鹸のことを自分の本に書くつもりだったら、私たちはこんな風にこれについて口止めされるはずありませんでした。もしかして彼は、死体の残りから石鹸を作り出すなんてことを、自分で思いついたのだろうか」

現在という時点から見れば、「犯罪だとは、誰にも言われていません」という青年の考え方を簡単に非難することはできない。しかしその当時、つまり戦時中や戦争直後の判断は、現在とは全く異なっていた。彼の精神はナチス・ドイツのプロパガンダによって壊されていた。ナウコフスカは青年の経歴を述べる際に、彼が本当に無邪気な若者であることを感じさせる。ポーランド語を話すことのできるグダニスクの出身者であった¹²⁾ 彼は、高等学校の卒業資格を得た後、ボーイスカウトとして戦場に動員され、敵軍に捕まったが、逃げたのである。「父親が強制収容所に収容されてから、あるドイツ人が彼の母親のところに住むことになった。このドイツ人が現地の解剖学研究所で彼に仕事を世話した。こんな風にして、彼はシュバンナー教授のところに来たのである。」しかし彼はこの〈仕事〉の内容が分からなかったそうである。「彼は私たち¹³⁾ が何を求めているのか分からなかった。」彼にとっては、人間の死体から石鹸を作るというような科学技術を徹底的に追求したことが、それほど恐ろしいことであるとは理解できなかった。あるいは、彼はドイツが戦争中であることから、ナチスの政策に無批判に従わなければならないと思いこみ、この〈人間の〉石鹸を使うことも経済的に優れたことであると考えたのかもしれない。

12) 第二次世界大戦前、グダニスク市は〈自由なグダニスク市〉(Wolne Miasto Gdańsk)と呼ばれて、ドイツ人とポーランド人が共存していた。彼はグダニスク市に住んでいたドイツ系ポーランド人であった。

13) ポーランドにおけるヒトラー犯罪調査のための中央委員会の委員。

「学生たちはどうだったかって？……僕たちと一緒にでした。最初はみんなこの石鹸で洗うのを怖がった。この石鹸が嫌で嫌で仕方なかったのです。臭いがひどかった。シュパンナー教授はこの臭いを消そうとしていろいろやってみました。精油を送るようにいろんな化学工場に手紙を書いていました。しかし、これは本当の石鹸ではないといつも分かっていました。

「もちろん、家では本当のことを話してしまったよ……最初、自分がこんな石鹸で体を洗えるなんてことが分かったとき、寒気がして、それを友達に見られたこともありました。母もひどく嫌がりました。でも、よく泡立ったので、洗濯に使っていました。僕の方は慣れてしまいました。この石鹸はよかったから……」

この青年の行動をどのように判断すればよいのか。彼のこの〈無邪気な立場〉をいくら弁護したとしても、人間が人間から〈この石鹸〉を生産することは、やはりとても残酷なことであると筆者は思う。そのこと自体が非人間的な行為であるというだけでなく、彼の考え方とこの行為の伝え方もナウコフスカによってきわめて冷静に描かれているので、より強い衝撃を与えている。さらに、この青年の行為をどれだけ攻撃しても、彼がナチス・ドイツの病んだ教育制度の生み出した結果であるという事実も変わらない。彼は、直接にナチスによって行われた虐殺には関係しなかったし、すでに何の抵抗もしなかった。さらに、自分の態度に対する恐怖感もなかった。彼の心を支配するはずだった道徳的判断、感受性が殺されてしまっていたのである。それ故に、彼は次のような言葉を口にできるであろう。「さすがドイツだな。連中は何も無いところから何かを作り出すことができるんだ……」。その〈何もないところ〉というのは〈人間〉を指しており、〈何か〉というのは〈石鹸〉を意味している。この青年の言葉は、それ自体、ポーランドの戦後文学における全体主義に対する強い告発となっている。すなわち、人間には何の意味もないのである。人間の体が生産のための手段、材料となり、さらにこのような思想を他の人間が自慢しているのである。全体主義の制度は人間の精神や感情を殺してしまい、この制度に対する狂信者ばかりを育てたのである。このように創られた人間

には善悪を判断する道徳規準が壊れてしまった。結局、残酷な実験に参加した青年には罪があったかどうかと簡単に非難することができない。

さらにもう一つの場面を引く。青年は言う。

「だけど、後になるとシュパンナーは頭のある死体を欲しがらなくなった。銃殺された死体も欲しがらなかった。仕事が多すぎたし、いつも腐っていたからです。(略)

シュパンナーはいつも予備の死体をとっておいていました。後の方になると、死体が足りなくなったから、その時には頭のない死体を使わなければなりませんでした。

(略) 死体が半分に切れていたのは、丸ごとは釜に入らなかった、収まり切らなかったからです。

ひとりの人間から約五キロの脂肪が取れるだろう。」

最後の文に注目すると、一人の人間から五キロの脂肪が〈取れる〉という表現が使われている。評論家ヘスカ＝クファシニエヴィッチはヘレナ・ザヴォルスカ (Helena Zaworska) の意見を引用している。「ここで作家は肉体的な殺人だけではなく、人間の精神に対する虐殺を告発するのである。」まさに、その通りである。ナチス・ドイツの教育のなかで、皮肉な言い方をすれば、とても実用的な考えが教えられた。すなわち、自分の国にとって敵がどのように役に立つかと言うことである。収容所に関することだけに限っても、工場や農場での重労働、医学の実験、さらに、人間の体の部分を利用して、石鹼、毛布などを生産することまで考えられたのである。

以上引用したナウコフスカの文章全体では、この青年の証言だけでなく、何人もの目撃者の証言がそのまま書かれている。前述したように、この小説は短編集の中でも最も恐ろしい物語であると思われる。冒頭の部分では人間の死体のとても精細な描写があり、まるでこの死体は元々が人間の身体ではなく、ただ生産の対象として存在するものであるかのように見える。さらに、終戦の直前にはドイツの経済が次第に悪くなっていったので、シュパンナー教授の研究室の学生たち、下働きの人々、主人公の青年を含

めて全員が、ドイツの将来を心配して、敵の〈全て〉を使って脂肪や骨で石鹸を生産したのである。「その時はドイツでは油が大変に不足していたからなのです。国家の経済情態を考慮して…」、そして自分の国民を喜ばせるために、シュバンナー教授のような研究者はグダニスク市だけでなく、アウシュヴィッツでも、人間の脂肪から石鹸を、また人間の髪の毛から織物を生産していた。しかし、一般のドイツ人にはこの脂肪の実際の原料が何であるのかははっきりと分からなかったはずである、たとえ彼らはそれが何からできているのか疑問に思ったとしても。

(4) ユダヤ人問題

本論文では、強制収容所について語る際に重要な問題の一つを忘れてはならない。ナウコフスカも『メダリヨヌィ』で、この問題に触れている。すなわち、ポーランド人にとっては、歴史上長く続いたユダヤ人問題が、現在もなお非常に曖昧なまま残っている。これは、数世紀前から続くポーランド人とユダヤ人の間の民族共存と、必ずしも深刻なものとは言えないものの、この共存の結果として生ずることになった両民族間の反目である。これが特に激しいものになってきたのは、第二次世界大戦の直前から前世紀の60年代の半ばまでであった。上の議論に続き、ここではナウコフスカがどのようにこの問題を扱っているか論じる。

実は、このポーランドの戦時・戦後文学におけるユダヤ人に関する問題は、ユダヤ人、特にホロコーストを生き残ってアメリカに亡命したユダヤ人の間では、戦時中のポーランド人の態度をどのように評価するかという問題と関連して、激しい論争的になったものである。しかし、本論文ではこの論争の内容とその解決について論じない。この問題はここで扱うには大きすぎて、またポーランド文学におけるユダヤ問題という別個のテーマに属するので、ここではこれ以上触れないことにする。それ故に、ここではナウコフスカの視点を大事にし、それをより注意深く検討していきたい。彼女の『メダリヨヌィ』の八つの作品のうち五つ、すなわち半分以上はユ

ダヤ人の絶滅の問題を扱っている。「墓地の女」, 「線路の傍で」, 「ドヴォイラ・ジェロナ」, 「ヴィーザ」と「人間は強い」がそれである。一番目の物語, 「墓地の女」についてはすでに少し触れたが, ここでもう一度, 他の角度から論じる。「墓地の女」はポーランド人の墓地を世話する女性の話である。彼女はワルシャワ・ゲットーの外にいて, 外側からだけそのゲットーの絶滅の恐ろしさを観察し, 見かけだけは落ち着いているように見える。しかし, 彼女の語る内容は, 彼女の話し方と非常に対照的である。彼女は人々の死について, 外見上はひどく落ち着いて語る。少しばかり涙を流すだけで, その様子はまるでもう彼女には泣き叫ぶ力が残っていないかのようである。この彼女の無力な姿のうちに——これは作者であるナウコフスカにおいても全く同じなのであるが——その隠された感情がよく見て取れるのである。墓地の壁のこちら側, ポーランド人が住んでいる側ではきちんと整った葬儀が次々と行われるのに対して, 壁の向こう側では, 忘れることのできない人間の悲劇がある。向こう側でも人間が死んでしまう。しかしその死に方は全く異なっている。

「最も酷いのは, 彼らには何の救いもないということです」(略)「抵抗する者はその場で殺されてしまう。抵抗しない者はと言えば, 車で連れていかれて, やはり殺されてしまう。それでは, 彼らはどうすればよいのか。彼らを家から出られないようにして, その家に火をつける。すると, 母親たちは, 子供たちの痛みを和らげるためにとにかく何か柔らかい布で彼らを巻いて, 歩道に投げ落としている! その後で自分たちが飛び降りている……何人かの母親は一番小さな子供を抱いて飛び降りている……」(略)

「私たちのところから, 父親が小さな男の子と一緒に飛び出そうとしていたところが見えた。最初父親はこの子を説得しようとしていたが, 子供は飛ぶのを怖がった。もう窓の傍に立っているのに, まだ父親に捕まったままだった。父親が彼を突き落としたのかどうかは, よく見えなかった。しかし二人は一緒に, 次々に落ちていった。」

この墓地の女のような, 壁の外側, 〈自由な〉側に住んでいるポーランド人は, 人間の悲劇を聞くだけである。彼女は, 「『ここではどの家も壁のす

ぐ近くであって、向こう側で起きていることはすべて聞こえるのです。(略)誰も寝られないし、食べられない。これを我慢できないのです。こんなことを聞くのは楽しいことでしょうか?』と調査をしている作家ナウコフスカに尋ねる。ポーランド人は傍から他人の悲劇を見ているだけで、墓地の女の言葉を借りれば、「あの人たちだって結局のところ人間です。だから、私たちは彼らに同情はします。」この単純な言葉は、ポーランド人の立場をよく描いている。というのは、まずポーランド人とユダヤ人との間の人間関係を正確に表現し、ついでユダヤ人に限らず犠牲者と犠牲者でない人々との間の関係を再現しているのである。

ポーランド人は、自分たちがユダヤ人から憎まれていることを深く認識していたのである。次に挙げる引用からこれが見える。さらに、ポーランド人とユダヤ人との間の全く同じ関係はボロフスキの作品にも現れている。また、ナウコフスカの他の物語にもあり、あるいはアンジェイェフスキの「聖週間」(Wielki Tydzień)にも見られる。ナウコフスカは次のように警告している。

「だけど、彼ら¹⁴⁾はドイツ人よりも私たちの方をもっと嫌っています。」
(略)

「自分でも分かるよ。彼らを知っている奥さん連中はみな同じことを言うだろうよ。ドイツ人がこの戦争に負けたら、ユダヤ人は私たちをみな殺しにしてしまうだろう。あなたは信じないの? ドイツ人自身もそう言っているし……またラジオでもそう言っていたよ……」

私より彼女の方がよく知っていた。このような思いこみが何かのために必要だった。

〈何かのために必要〉であった、その〈何か〉とは、いったい何であったろう。これは自分を攻撃する言葉であったのではないであろうか。自分の無力、あるいはポーランド人の無力に対する弁解の言葉であったかもしれ

14) 筆者註：ゲッターのユダヤ人

ない。他人の惨事を聞いて想像しているだけで、何もしないし、あるいは何もできないのかもしれない。それでいて、活動しないことの結果だけに怯えている。この物語では、どうしてユダヤ人を助けることができなかったのか、という問題は立てられていない。ただその事実だけが述べられているのである。

これと似たモラル的な問題は、再び「線路の傍で」にも出てくる。これは強制収容所へ輸送される途中で逃亡することに失敗したユダヤ女性についての話である。ノウコフスカはわずかなページ数でドラマチックな物語を描いている。この物語は、道徳上の基準に照らして適正な解決を見つけることが困難な状況を描き出している。ノウコフスカはユダヤ人に対するポーランド人の敵意のある立場を冷静に述べている。強制収容所への輸送列車から逃亡した若い女性を助けようとしなさい、さらに彼女だけでなくそもそもユダヤ人をほとんど助けようとしなさい、無関心あるいは無力なポーランド人が、作家自身の直接の言葉ではなく、場面を描写することによって責められている。このユダヤ女性は逃亡中に足を撃たれて、歩けなくなり、逃げることもできず、自分を守ることができないのである。遅かれ早かれ死ぬに違いない。彼女を見つけた人々はこのことが分かっており、人間に対する最後の助けをすることを願っているのかもしれない。しかし、そのような考えを持つと同時に、昼間なので、もしユダヤ人を助けているところを見られたら、自分たちが必ず殺されてしまうことも分かっている。数日の間、線路の傍、林の近くで、大勢の人を前にして、けがをした女性は死を待っていた。スケッチのようなこの場面は、事実だけを描いているので、その与える印象は非常に強いのである。ただ一人の青年が彼女の傍によく現れた。ある時、頼まれて彼女にタバコとウォッカを持ってきた。

彼女は人々の間に横たわっていたが、彼らからは助けを期待していなかった。狩猟の時に傷ついたまま殺し忘れられた獣のように横たわっていた。酔っぱらって居眠りしていた。彼らから彼女を隔っていた恐怖の輪の力は克服しがたいものがあった。

彼女が自分を殺してくれと頼んでも、誰も「そうする決心がつかなかった」。警察官も二人来たのに¹⁵⁾、彼女を殺すつもりはなかった。彼らにとって、また他の市民にとっても〈殺すこと〉はむしろ非人間的な行為であったであろう。「墓地の女」の主人公に比べ、彼らの行動はより残酷である。ナウコフスカは彼らの行動の善悪についての判断を読者にまかせる。作者は事実だけを述べて、それ以上のコメントをしない。その当時は、誰かユダヤ人を助けてやろうとすれば、必ず自分が殺される、あるいはドイツ人に密告されるという恐怖の時代であり、ポーランド人は非常に怖がっていたのである。

実は、これも論争的になったテーマである。戦時中、ポーランド人はユダヤ人を助けたのであろうか、もし助けようとしなかったとすれば、それはなぜであろうかというモラルに関する大きな疑問が、戦後のポーランド社会に投げかけられたのである¹⁶⁾。

ナウコフスカの物語に戻る。夕方になって、死に臨むユダヤ女性のところに二人の警察官と若い男性が戻ってきた。この男性は銃を借りて、彼女を撃った。彼女から少し離れたところにいた他の人々は「射撃の音を聞いて、憤激で背を向けた」。ここで注意しなければならないのは、この言葉を語ったのは〈誰〉なのか。ナウコフスカは目撃者の証言をそのまま記述するだけであるので、この言葉を言ったのは近づいてきた〈他の人々〉である。

ナウコフスカは同じ目撃者の言葉をさらに引用する。「この話をした人は『だけど、どうして彼が彼女を撃ったのかは、よく分からない』と言っ

15) 筆者の考えでは、この物語に出てくる〈警察官〉(policjant)はドイツ人の警察官ではなくポーランドの警察官であり、ユダヤ人に対してあまり敵意を持っていない警察であったと思われる。

16) 映画監督キシシュトフ・キェシロフスキ (Krzysztof Kieslowski, 1941-1996) は1989年に『デカログ』(Dekalog)と題した10の物語においてこのテーマに触れ、ふたたび大きな議論を引き起こすきっかけを作った。

た。『このことが僕には理解できない。彼が、もしかしたら彼女のことをかわいそうだと思っていたように見えた……』。これ以上ナウコフスカは何も書かない。それに対する答えを見つけるのは読者自身である。彼が彼女を撃ったことは残酷さの証拠であったのか、それともこのユダヤ女性の立場に対する純粹な同情の証拠であったのか、その答えは決して簡単に出すことはできない。このような場合にとられる、モラル的な行為とはいったい何であろうか。彼女をもはや助けることができなくなったので、安楽死のように殺されただけであろうか。しかし、そうでない可能性が高いと筆者は推測している。この場面ではポーランド人とユダヤ人の間に昔からあった民族の不調和が見える。彼女は、ユダヤ人であり、周辺のポーランド人に危険な状況をもたらすかもしれないので、「犬のように」撃たれるべきであったのであろう。ポーランド人は彼女の死を確認して自分を安心させたのであろうか。彼女に対する同情があったが、とても浅かった。

ナウコフスカはこの民族の問題を非常に巧みに語っている。作家個人の感情が全く入らないが、ユダヤ人に対するポーランド人の気持ちが完璧に伝えられていると筆者は思う。

(5) 〈人間は強いもの〉

ナウコフスカの文学作品を現代人の立場から分析しているエヴァ・クラスコフスカ (Ewa Kraskowska)¹⁷⁾ は、ナウコフスカの戦前と戦後の作品を比較し、一貫して見られるこの作家の一つの傾向に注目している。

他人の不幸ならびに他人の苦悩と共にあるという問題は彼女の文学活動から消えないであろう。他の生きている存在の苦しみが彼女を磁石のように引っ張った。ひとたびこの苦しみと接触したなら、もはやこの苦しみに参

17) Ewa Kraskowska "Zofia Nalkowska", Dom Wydawniczy Rebis, Poznań 1999, pp. 62-71 による。クラスコフスカは、ポズナニ大学ポーランド語学科の研究者である。「現在も読まれる作家たち」(Czytani dzisiaj) というシリーズでナウコフスカの生涯と文学活動についての徹底的な分析を行った。

加すること以外に道はなく、この苦しみから自由になることもできなかった。

ナウコフスカは戦前の作品では動物たちの苦しみを描き、それらにとても同情していた。当時彼女がドブネズミ同士の憎しみ合いを描いた調子と、後に『メダリヨヌィ』で登場人物の姿、態度、感情を描く調子は全く同じようである。クラスコフスカは、他の評論家とは少し異なった立場に立ち、興味深い面から『メダリヨヌィ』を考察している。彼女は次のように書いている。

ナウコフスカがこの作品を、彼女の他の作品とは、異なる文体を使って書いたとされているが、それは本当ではない。この恐ろしい悪に対するあまりに即物的な調子は、ずっと以前から彼女の作品に織り込まれていた。これは一方で知性と敏感な精神の自己防衛であり、もう一方では、語り手が話していることについてコメントをしなくても充分であるという効果的な説得の方法である。それ故に、『メダリヨヌィ』の特徴は、作品の革新性ではなく、すでに十分に確立された特別な芸術的手法がさらに凝縮されたという点にある。そして、この物語では（略）そこで述べられている事件の動機やメカニズムを理解しようという試みは、このような手法にはそぐわないのである。

それ故に、『メダリヨヌィ』はゾフィア・ナウコフスカの作品のなかで特別な作品であるということにはならないが、これまで彼女が示してきた世界観と、人間観を補足するものであるとも言えるかもしれない。

クラスコフスカによって、ナウコフスカはすでに戦前に使いはじめた文体を『メダリヨヌィ』にも用いたのである。その通りである。主題だけが違う。戦前に書かれたフィクションの物語の文体と、戦後になってユダヤ人問題やアウシュヴィッツなどの悲劇的な事実を語る文体は変わっていない。だが、描かれている事実に関して作家のスタンスがより強く感じられる。

『メダリヨヌィ』に収められたそれぞれの物語は、悪の前に立たされた人間がどのような態度を取ったとしても、その態度を判断する側から見れ

ば、結局は他人に損害をもたらすものとなることを語っている。作者としてのナウコフスカは読者にこのことを暗示するだけである。「線路の傍で」、「墓地の女」などの主人公たちの行動は悪い行動なのか。その答えは、時代によって、また読者の経験によって違うであろう。

さらに、『メダリヨヌィ』には収容所の悲劇をいわば外側から目撃した主人公たちの話だけではなく、自ら経験した、すなわちこの悲劇における直接の参加者の話もある。「ドヴォイラ・ジェロナ」という物語の主人公である若いユダヤ女性は幸いにも戦争を生き延び、自分の体験を話すことを望んだ。彼女のこの強い意志は、ポロフスキの作品、あるいは原民喜の作品の主人公たちを思い起こさせるものがある。ドヴォイラは生きることを強く望んだのである。

「ねえ、聴いてちょうだい。私は生きてかったの。どうしてなのかは、分からない。主人が死に、家族が死に、もう誰もいなかったけれど、それでも私は生きてかった。片目を失い、お腹が空いて寒かった。それでも私は生きてかった。なぜだろう？それは、こういうことなの。こうやって今貴女に話しているように、こういったことを全て誰かに話すために生きてかったの。彼らが何をしたのか世界中の人に知って欲しいの。」

彼女は東ポーランドに住んでいて、戦争のはじめに夫を失った。ユダヤ人は全員近くにあったトレ布林カ強制収容所へ輸送されることになることと予想して、しばらくは自分一人で隠れていた。しかし、食べ物がなくなったので、姿を現し、服を売って他のユダヤ人と一緒にゲットーで生活した。生きる価値があるか疑うような失望の時期と希望の時期があったが、結局一人で死ぬより、みなで死ぬ方がよいと決心した。

「自分から他のユダヤ人の後について私もこのマイダネックへ行った。お金もなく、食べ物もなく、目もない。そしてユダヤ人もいない。そんな状態で、一人でこの屋根裏にいて、いったいどうすればいいのさ。もうパン一切れもなかった。もし死ぬならば、一人じゃなく、みんなと一緒に死にたいと思った。そんな訳でマイダネックへ行ったの。あそこではパンはほん

の少ししかくれなかった。十二時にはスープがでた。」

彼女は若くて強かったので、マイダネックからスカルジスコ＝カミエンナ市（Skarżysko-Kamienna）にあった弾薬工場へ移されて、そこで働いていた。片方の目がなかったので、少し辛かったが、一日も休まず、再び「とても生きたい」と思うようになった。ソ連軍のポーランド領解放と同時に、ドイツ軍は西に移動し、この弾薬工場も移動もした。ついにチェンストホヴァ市（Częstochowa）をソ連軍が解放した。働いていた15,000人のユダヤ人のうち、解放の日には5,000人しか残っていなかった。ナウコフスカの物語における主人公の最後の言葉を見てみる。これは彼女のような人間の持つ失望感を完璧に再現するものであると思われる。このシーンはソ連軍が工場を解放したことを描いているが、言葉を節約しているにもかかわらず、とても印象的である。

彼らが来たことを喜んでいたのか。もちろん、とても喜んでいたよ。もう有刺鉄線に囲まれていなかったんです。自由の身だったんです。[ソ連軍を] 歓迎したけれど、叫ぶこともなかったし、何もしなかった。

彼女はため息をついた。

「私たちにはもうそんな元気もなかったんです……」

最後まで自分の民族とともに生きることを望んだドヴォイラとは全く逆の立場に立たされたもう一人の若い元ユダヤ教徒女性の話は「ヴィーザ」に出ている。彼女は戦争のはじめに、自分の命と魂を救うためにカトリックに改宗した。当時、教会の書類を受けとるという目的だけで改宗することがよくあったが、それとは違いこの物語では主人公がユダヤ民族とはっきり縁を切るという立場に立っている。また他のユダヤ人について話す時にも、かなり大きな遠い距離を取っている。彼女がカトリックに改宗したのは、多くの不正と残虐な行為を目にし、自分もそのように苦しむことになるのを恐れて、「これに耐えるためには、イエス様の苦しみを考えることが助けになった」からである。

『私はユダヤ人に対する嫌悪感はありません。蟻や子ネズミに対する嫌悪感がないのと同じです。』これは物語の最初の言葉であるが、その後も、この最も短い話の中に何回も同じ感情が現れてくる。そしてかつてユダヤ教徒であった彼女と、収容所に送られた他のユダヤ人の間の感情的な距離に起因するある種の緊張関係が生じる。

さらに、この物語はユダヤ民族に対するナウコフスカの敬意を表す文章である。つまり、収容所の目撃者にして、元ユダヤ教徒である主人公の報告を伝えると同時に、ナウコフスカは作家として、人間として、ユダヤ民族の苦しみに敬意を表しているのである。

ちょうどその日、[ユダヤ系]¹⁸⁾ ギリシャ女性たちは国歌を歌っていた。ギリシャ語ではなかった。彼女らはヘブライ語でユダヤの国歌を歌っていたのだ……この日差しのなかで、あたかも自分たちが健康であるかのように、とても美しく、大声で、力強く歌っていた。
「これは肉体的な力によるものではなかったのです。分かるでしょうか。彼女たちが最も弱かったんですから。これは生への渴望、また力強い願いといったものの持つ力だったのです。」

この物語では、とくに女性収容所の描写が残酷である。題名の「ヴィーザ」はある恐ろしい場所を象徴している。バラックを掃除するときに、囚人女性たちは森の近くにあった草原へ追い出され、食べることも許されず、働くこともなく、ただ一日中立っていることを強制されたのである。体が弱くても心の強い、ユダヤ系ギリシャ人のような囚人たちだけが、このような屈辱に耐えることができた。毎週ヴィーザで選別が行われ、ガス室に送られる女囚人が増えてきた。ユダヤ人の国歌は、カナンというパレスチナ地方にある〈約束の地〉にユダヤの国民が絶対に戻るという希望を与えるものである¹⁹⁾。この歌はユダヤ人に2000年前からずっと希望、「生への渴

18) [] 内は筆者が補足した。

19) ユダヤ人の国歌“Hatikva”(「希望」)は1882年に Naftali Herz Imber (1856-1909) によって作られた。

望、また力強い願いといったものの持つ力」を与えた。

『私は怖くはなかった。死んでしまうと知っていたので、もう怖くはなかった。』彼女は自分自身について、殴られているときにはいつも祈っていたと言うことができた。憎悪を感じないために祈っていたのだ。それだけだった。」彼女はもはや死を怖がらない。敵でも愛しなさいというキリスト教の道徳に従って祈っているだけである。体ではなく、心の強い人間はどのような屈辱でも耐えられるであろう。やはり、人間というものは強いものである。

『人間は強いものだ。まだまだちゃんと働けるだろう』という言葉は、全く異なった文脈で SS 親衛隊によって言われた言葉である。この言葉はナウコフスカのもう一つの物語の題名となった。若いユダヤ人ミハウ P (Michal P.) が東ポーランドにあったユダヤ人強制収容所で、殺された人々を周りの森に穴を掘って埋める仕事に従事していた。彼自身は体が強かったので、親衛隊によってそう命じられたのである。

「ある日、これは火曜日だった、ヘウムノ²⁰⁾ から来た三台目の車から、僕の妻と子供たちの死体が投げ出された。男の子は七歳で女の子は四歳でした。その時、妻の遺体の上に覆い被さって僕を撃ってくれと頼んだ。」

確かに、人間というものは強いものである。その後すぐに彼は労働隊から逃亡し、あるポーランド人の農家に身を隠して終戦まで生き延びた。戦後になって、ナウコフスカの調査委員会と一緒に家族が埋められた場所を訪れた。もっとも親しい人々の死を見たにもかかわらず、やはり、人間というものは強く、とにかくも生きることを望んでいるのである。

ナウコフスカの主人公たちは地獄を見たり、経験したりしたにもかかわらず、第一に生きることを望んだのである。「底」の主人公はパヴィアック刑務所、ラーヴェンスブリュック強制収容所、さらに弾薬工場の事情を

20) 筆者註：Chelmo, 東ポーランドにあった強制収容所。当時はまだガス室と焼却炉がなく、殺された囚人は土に埋められた。

語っている。この話の内容と語り方はそぐわない。収容所を経験していない一般の人々は、平然として最も恐ろしいことを思い出し、語る女性の話を不思議に思い、その平靜さが彼女の実際の精神状態であるとは信じられないであろう。なぜかという、彼女の声には、ナチスに対する何の気持ちもない。嫌悪、憎悪、怒りもない。ワルシャワにあった最も残酷な刑務所であるパヴィアックの拷問、そのパヴィアックからラーヴェンスブリュックへの輸送の有様、その収容所の生活などについて語る時、彼女はごく普通の日常の生活について語るのと同じように語る。なぜであろうか。彼女は、この〈底〉、人間の屈辱・墮落の底を経験して生き残ったので、それ以上もう怖いものはなくなったと同時に、人間に対する希望の全てをも失ってしまったに違いない。人間は強いものだ。身体も強く、精神も強い。

(6) アウシュヴィッツ——〈死の工場〉

『メダリヨヌィ』に収められた最後の作品である「オシフィエンチムの大人たちと子供たち」は、アウシュヴィッツ強制収容所だけでなく、全ヨーロッパにあった収容所のガス室などで殺された大人と子供たちに捧げている作品である。これはナウコフスカが書いた、いわばこの短編集全体のまとめのようなエッセイであり、単純な事実だけを報告するという、まさにそのことのために最も恐ろしい記録となっているのである。

「シュパンナー教授」の主人公たちの〈誤りのない〉考えと同じように、この「オシフィエンチムの大人たちと子供たち」に描かれたナチス・ドイツの〈成功〉の話そのものが、全体主義に対する大きな告発である。

ナウコフスカは様々な種類の残酷な拷問とそれを執行した犯罪者たちの姿を描き出したうえで、次のような結論を出している。

確かに、この人々はこのようなことをすることができる人々であったが、しかしそうしなければならない義務はなかった。しかしながら、人間の意識の下に眠っていて、もし起こされることがなければ、決して表面には出るはずのなかった、そのような人間の力を、彼らから引き出し、始動させ

るために前もってあらゆる準備がなされたのである。

すでに戦前、彼らは特別な選別をうけ、優れた体格の男女だけが選ばれて、時にはサディスト的な訓練を受けて、強制収容所での勤務に任命された。彼らの任務の目的ははっきりしていた。ナチス・ドイツの収容所とは何だったのかということは、ナウコフスカの次の言葉に集約されているといえる。

オシフィエンチムという稀有な現象について知るにつれ、(略)政治的であると同時に経済的でもあり、言い換えれば理念的であると同時に実用的でもあるという、いわば二重の性格を持つ課題を果たすために、この収容所の組織と施設が極めて意図的に使用されたという事実が、我々に大きな衝撃を与える。

政治的な課題とは、ある地域を、その自然的ならびに文化的豊かさを含めて絶対的に支配するために、この地域からその住民を追い出すということである。経済的な課題とは、この計画の実行が、単に如何なる損害をももたらさない、如何なる出費をも必要としないだけでなく、逆に、そこから利益を引き出すことのできる源泉となるということである。このことはまず、第一に軍需産業の工場における囚人の労働という形で、第二に原料という形、すなわち亡くなった囚人の財産を横領するという形で行われたのである。

このようにして計画され実行された事業も、また人間が遂げた業である。人々はこの事業の実行者であり、またこの事業の対象であった。人間が人間に対してこのような運命を定めたのである。

ナウコフスカが、それぞれの犯罪者の名前を具体的に挙げていないということも、『メダリヨヌィ』の特徴の一つである。一人一人のナチス・ドイツの犯罪者にも大きな罪があることは当然である。しかしながら、彼女が告発するのは、ナチス・ドイツの全体主義なのである。

(7) 子供たちの絶滅

意識的、意図的に、一つの民族が他の民族を消滅させる計画を立てた。

ドイツには経済的利益が流れる一方、強制収容所では人間の尊厳が奪われ、恐怖が支配し、人々が苦勞し、大変な犯罪が行われていたのである。ナウコフスカが描いている死は、戦争に参加して捕虜となった戦士の死ではなく、社会の中で最も弱く無垢な存在、すなわち女性たちと子供たちの死である。とくにアウシュヴィッツに生きていた子供たちは、いつかは殺されることを意識していたのである。

ガス室で窒息死させるために選ばれたのは、小さな、まだ仕事のできない子供たちであった。選別作業は、子供たち一人一人に一メートル二十センチの高さのところにかけている棒の下を歩かせるという形で行われた。子供たちはこの瞬間が厳粛な時であることを知っていて、小さい方の子供たちは棒に近づくと、棒に頭をぶつけて自分の命を救おうとし、背を伸ばして、爪先立ちで棒の方に向かうのであった。

ガス室での死を決められたおよそ600人の子供たちは、まだガス室を満たすために必要なだけの人数が集まっていなかったので、監禁されることになった。彼ら自身もどういうことなのかよく分かっていた。収容所中を走り回り、隠れようとしたが、SS親衛隊員が再び彼らをブロックへ追い込んでいった。子供たちが泣いたり助けを求めて叫んだりしている声が、遠くからも聞こえた。

「ガス室へ行きたくないよ！ぼくたちは生きていたい！」

この子供たちが自らの死を知ってこのように助けを求めて訴えたことは、人間に対する最も悲惨な出来事である。子供たちの泣き声はもっとも残酷な訴えである。言葉を節約した、つまり余分な説明を加えることを避けたナウコフスカは、作家としてのコメントをしなかった。彼女は事実をだけ並べていることによって正義を要求しているのである。

5) おわりに

この小論の議論として、再びナウコフスカの言葉を引用する。ある晴れた朝、収容所のブロックの間で、生き延びている二人の小さな子供が短い枝で道の砂を掃いていた。一人の囚人が立ち止まって、何をしているのか

尋ねると、子供たちは次のように答えた。「『ぼくたちはユダヤ人を焼く遊びをしているのさ。』」戦争しか知らない子供たち、「ユダヤ人を焼く」という遊びしか知らない若い世代の未来は不安に満ちているのである。さらに、ユダヤ人を簡単に殺すという遊びの感覚は、大人のポーランド人のユダヤ人に対する関係を暗示している。

この問題は現在まで明らかに解決されていない。戦前まで平和共在をしていたこの二つの民族の間に、戦争中—ナウコフスカが『メダリヨヌィ』で描いているように—多くの問題は起きた。しかしながら、この問題がまた別の小論で語られるべきである。

ナウコフスカは1946年に書いた『メダリヨヌィ』で強制収容所の日常生活を語ることにより、収容所に深く関連するさまざまな人間や出来事を描いている。さらに、戦争直後ポーランド人が直面しなければならないユダヤ人問題を明らかにしている。

Summary

A Polish Writer, Zofia Nalkowska, writes about the Concentration Camp in Auschwitz

Urszula Styczek

Auschwitz, a symbol of human deterioration, humiliation and evil, has been amply described in various ways by world historians, documentarists, former camp prisoners, etc.. However, my interest in this topic is concentrated on a representative of one more group, i.e., fiction writers. This paper discusses how the image of Auschwitz was presented by one of the most famous Polish pre-war writers, Zofia Nalkowska (1884-1954), in her compilation of short stories, “Medallions” (“Medaliony”, 1946). During my studies of the Polish literature on the concentration camp in Auschwitz, I divided the writers into two groups, those who had experienced the camp, luckily survived and then shared their tragedies with us; and those who never knew life in the camp, but through interviewing witnesses, and checking the evidences of the tragedy, wrote novels and shorts stories based on them. Zofia Nalkowska belongs to the second group. As an experienced author, she talked to those who survived Auschwitz. Each of her eight “Medallions” describes a different approach to Auschwitz: for example, the fate of a Jewish woman who ran away from a transport to Auschwitz, or the fate of those who fought in Warsaw Ghetto, or an account of a young man who was luckily transported from Auschwitz into Germany. Finally, the last story tells about the cruel fate of the children forcibly deported to Auschwitz. Each of the stories is like a medallion, engraved in a grave-stone to be always remembered.